

《翻訳》

医師の義務と資格にかんする講義（承前）

Lectures on the Duties and Qualifications of a Physician (1770, 2nd 1772) ¹

ジョン・グレゴリー
(John Gregory)
(松家次朗訳)

第3講義

さて次に医学 (physic)²のいくつかの分野とその実践部門との諸関係について説明し、信望と成功をもって「医学を」実践する³ためには、こういった諸部門の事前の知識がどの程度必要かの探究に進むことにする。

[医学のいくつかの分野とその実践との関係] [これらの分野の研究にあまりにも多くの時間を費やすことの不適切性について]

ここで前もって是非とも述べておきたいのは、自然のすべての働きはきわめて密接に結合されているので、それらのいかなる部分もそれを個々分離した状態で考察し研究することでは十分に理解されえないということである。それ故、医学の実践 (practice) のための条件を満たすためには、様々な分野の知識が、ほとんど関係がないように見えるにもかかわらず、不可欠である。こういう事情なので、医学生は自らの職業に光を投げかける見込みがないか、あるいはいわずかな見込みしかないものの追求に時間と労力を無駄にしないよう用心

*2014年1月30日受理。

することが肝要である。人生は、医師にとって光彩を与えると思われるすべての研究をするにはあまりに短すぎるし、医学と何らかの関係を持つすべての研究のための時間をすら与えてくれないだろう。まさにこれから私が名前を挙げようとしている諸科学の一つ一つがすべて大きな広がりを持つのであるが、それらのうち [医学の] 実践に本当に役立つ部分に自らの努力を限定することが医師には必要だろう。医学生生の資質 (genius) が彼をしてこれらの予備的な諸科学のどれかに [他のものにまして] 特に心を傾倒させる場合、自らに負担にならないよう、これを医学の研究だなどと見なさないように気を付けるならば、どうしてもというのであれば、それを心行くまで楽しむことは許されるかもしれない。

[解剖学、生理学の知識の不可欠性について]

医学の実践にとって解剖学の事前の知識が必要なことは明らかで、説明を必要としない。

動物の流動体 (fluids) [体液] およびそれらの健全な状態におけるすべての機能に関する学説を包含する生理学の知識の必要性もまた同様に明白である。この主題 (subject) を探求すると、あなた方は人間の身体が、きわめて正確な力学的な (mechanical) 原理の上に構築された一つの機械 (machine) だということを発見するだろう。そうであれば、その動きを理解するために、力学の諸原理にあなた方は十分精通していなければならない。人間の身体を別の視点から考察すると、あなた方は異なる種類の流動体 [体液] がさまざまな直径の管を通して循環していることを発見するだろう。それ故、それら流動体 [体液] の運動の法則は水力学 (hydraulics) の知識なしには理解されえないことになる。目が見事な光学的機械であることは明らかである。そうすると当然、視覚 (vision) という現象は光学 (optics) の諸原理の知識なしには説明されえないことになる。人間の身体は弾性的な流動体、すなわち空気によって囲ま

れているが、空気は、重力、熱、湿気、および〔人間の〕体質（constitution）に大きな影響力を持つその他の諸性質に関して、種々の変化を被りやすいので、この流動体〔空気〕の本性と種々の固有性に精通しておくことは当然のことである。この知識は、空気力学（pneumatics）という科学を構成している。自然哲学のさまざまな分野の知識が、動物の生体システム（animal oeconomy）⁴の正しい理解にとってどれほど必要かを示すために、もっと多くの例を挙げることは容易であろう。

〔自然哲学と化学（chemistry）の知識の不可欠性について〕

しかし、動物の生体システムの異なる現象がすべて、一般的な（common）力学によって説明されるわけではない。化学的な諸原理から、種々の変化が流動体上に引き起こされるからである。それ故、私たちの流動体の化学的な来歴（history）や、それが何であれ食物や薬として人体中に摂取されるものの化学的分析や、さらに一般的に、いかなる程度であれ、人体に影響しうるあらゆる物質の化学的分析に精通しておくことが不可欠である。このことは、医学の実践の研究に先立つ、化学の知識の不可欠性を示している。

〔心（soul）と身体の合一（union）および神経系の諸法則は、力学的もしくは化学的諸原理にもとづいては説明できない〕

しかしながら、解剖学や、さらに力学および化学の諸原理の、最も正確な知識ですらも、身体のあるあらゆる現象を説明するには不十分である。動物機械（animal machine）は、多くの点において無生物の（inanimate）機械とは異なる。前者はそれ自身のうちに運動を始める力を持っている。ある内的原理が、身体のために作用を統制し、かつそれらに影響を与える。〔そしてこのことは〕これまでに知られている力学もしくは化学のどの原理とも区別され、かつ〔それらの原理に〕依存しない一連の法則によってなされる。同じよ

うに、動物の身体は、ある程度まで自分自身の病気 (disorders) を治し、その自然状態からの多くの逸脱を修正する力を備えている点において、一般的な (common) 機械とは異なる。骨折した骨や、傷口の肉芽形成 (incarnation) や、一方の腎臓が破壊されるかもしくは役に立たなくなった場合のもう一方の腎臓の肥大や、そしてさらに、多くの病気の治癒における「自然 (Nature)」⁵ のうまくいった諸々の努力の場合のように。動物の身体の現象を力学的および化学的な諸原理のみにもとづいて説明しようとする多くの脆弱な試みがなされてきたが、成功しなかった。

神経系の諸法則は、最も困難な探究に属するが、「自然」の他のいずれの諸法則とも同様に一定で規則的である。精神と身体のそれぞれに与える相互的影響に関わる諸法則もそうである。[これは] 医師にとって極めて重要な研究である。この研究は広範囲にわたる興味ある主題に、すなわち、人間の精神の諸能力の来歴という主題に通ずるが、用心していなければ、気付かないうちに私たちが形而上学の迷宮へと導いていきかねないものである。才能ある医学生は、自らの注意力をこの種のもっともらしい哲学にあまりにも深く没入させないよう用心深くあるべきである。その種の哲学は、想像力にきわめて大きな余地を与え、そして実験にはあまりに小さな余地しか与えないし、一見独創的に見えて、実際には取るに足らないものであり、役立たないものなのである。要するに、[それは] 精神を自ら自身の創造物である微細な事象に絶え間なく従事させ続けることによって、すぐにもその精神をして「自然」の忍耐強く骨の折れる探究をできないようにさせてしまう哲学なのである。

[比較解剖学]

人間の生理学を具体的に説明するためには、人間にきわめてよく似ているいくつかの動物の比較解剖学の知識は必須である。動物の生体システムにおけるいくつかの重要な発見は、最初に野生動物においてなされた諸々の実験によっ

で具体的に示されたが、その多くは人間の被験者 (human subject) ではなされえなかったであろうものである。例えば、血液循環、呼吸、筋肉運動、身体の異なる部分の感受性 (sensitivity) や反応性 (irritability)、そしてさらに、種々の薬の効果といったものに関する実験がそうである。様々な野生動物の本能は、ときに価値ある治療薬の最初のヒントを与えてきたし、また、それらに対して正しく注意が向けられるならば、養生法 (regimen) や病気の治療といった主題にも光を投げかけるであろう。しかし同時に、比較解剖学はあまりにも拙速に人間の身体に適用されると、大きな過ちに導くこともよくあるということも認められなければならない。

生理学の著者たちはたいてい、身体を一様に同じ現象を呈する恒常的な主体と見なしてきた。しかし、動物の生体システムの知識を [医学的] 実践に適用する際には、人間の体質を絶え間なく変動するものと見なす必要があり、そしておそらく任意の二人の人物 (persons) において正確に同じものはないと見なす必要がある。人類間における体質の多様性を遡って明らかにするのは果てしのないものになるだろうし、またあまり役立つ探究でもないであろうが、しかし、注目する必要があるいくつかの相違が存在する。こういった相違は主に、年齢、性、気候、生活様式、そしてさらに、これらの事情のいずれによってもつくられないいくつかの根源的な気質 (temperaments)、あるいは身体の性癖 (habits) に由来する。精神 (mind) と身体の間の一の諸法則の探究は生理学に属し、文化と教育が与える体質への影響の探究や、性癖の持つ力や激情の諸々の結果や、さらに想像力の持つ力の探究も [また同様である]。この手短な列挙によっても、生理学がいかに広範囲な研究であり、またいかに医学の実践の研究と密接に関係しているかが示されている。

[病理学]

生理学は動物の生体システムのすべての現象を健全な状態において考察し、

病理学はそれらの現象を病的な状態において考察する。それは病気の原因、結果、症状 (symptoms) の一般的な学説を提供する。「治療学 (therapeia)」は病気の治療において遵守されるべき一般的法則と治療薬の一般的性質を扱う。これには手術法 (surgery) と「処方集 (materia medica)」が含まれる。力学の知識の有用性は、手術法の実践においてもっとも明瞭に現れる。実際、この技術は、力学の理論がより一般的に理解されるようになって以来のここ二、三百年の間にさわめて大きな諸々の進歩を経験した。

[医学の理論、それが正確に意味すること]

生理学、病理学、治療学 (therapeutics) は、「医学の基礎 (Institutions of Medicine)」と呼ばれるもの、そしてまたある人々によっては「医学の理論 (Theory of Physic)」と呼ばれるものを形成する。この語⁶は、理論 (Theories) という名⁷を騙る、ときにもっともらしく聞こえるが、誤って基礎づけられた諸々の仮説によって余にも長い間乱用されてきたので、今では「医学理論」という表現そのものに対して、一般的な偏見が広がっているほどである。あたかもそれ [医学の理論] には役に立たない論説や、整理整頓の誇示や、主として名目にすぎない微細な区別や、それらの多くが間違ったものである一般的諸原理の設定や、そしてさらに、有用な適用がまったく出来ないほどに茫漠としているか、あるいは、あいまいな他の諸原理の設定しか含まれていないかのようである。しかし、これは医学 (medicine) の理論もしくは基礎に関する誤った表現である。これら [医学の基礎] には、健全な状態であれ、病気の状態であれ、動物の生体システムを具体的に説明するのに資するあらゆる事実が含まれているべきであり、また治療の指標を形作るうえで医師の役に立ちうるあらゆる事実が含まれているべきなのである。これらの事実は、一般的な諸原理を確定するか、あるいは少なくとも、一般的諸原理を指し示す、特に [医学の] 実践へと導いていく一般的原理を指し示すように、正確に配列整

理されるべきなのである。このように見れば、それらの基礎は、医学の実践の当然の予備段階となる。

[処方集]

「処方集」の知識は、医学の実践と密接に繋がっている。それには、医師が手術を行う際の種々の手段や、諸々の薬（medicines）の効能の来歴に関する諸々の学説が含まれている。この分野における化学的知識の有用性は明らかである。その知識は、医薬品の有用な部分をいかに保存し、いかに分離するかを教示する。薬学（pharmacy）を理解するためには、まさに化学の知識は不可欠である。この知識の欠如のために、少なくともこの知識の適切な適用が欠如していたために、真の薬学は最近に至るまでほとんど理解されなかったのである。

医薬品の人体への効果は、ときに力学的な原理にもとづいて、ときに化学的の原理にもとづいて説明されるが、しかし、そうした効果は、[それらの原理にもまして] はるかにしばしば、それらの医薬品が神経系に及ぼす諸々の効果に依存し、そしてまた、こうした [諸々の効果の] 結果として、種々の動物的運動および分泌物の過剰もしくは欠乏に及ぼす [諸々の効果に由来するのである]。

[植物学]

植物学という学問は、それが諸々の植物をきわめて使いやすい体系へとまとめあげることによって植物に関する知識を容易にするかぎりにおいて、医学の実践の目的に役立つものとなる。したがって、医師にとってあらゆる植物の名称と歴史に特に精通しておくことは必要ではないが、しかしそれでもなお、彼は、その体系においてそれぞれの植物の場所を見つけ出すことができるほどには植物学の諸原理をきちんと身につけておくべきであるし、食事療法（diet）

あるいは薬（medicine）において使用される植物には特に精通しておくべきである。

〔医師がこれらの予備的学問をきちんと学んでおくことの必要性について〕⁸

さて〔以上で〕私は医学のいくつかの分野と「医学的实践（praxis medica）」との結びつきについて簡単に説明し終えたが、医学的实践には、「養生法（hygiene）」、すなわち、健康の維持と生命の延長の方法および、一般的病理学と、そしてさらに一般的治療学の、特定の病気の来歴と治療への適用が含まれる。そうすると、当然〔次のように〕問われるであろう。すなわち、学問のうちで以上に述べたすべての部分は〔医学の実践にとって〕不可欠な予備段階だと判断されてきたのだが、こういったすべての部分をマスターしていない人は、医学や外科の実践の資格がないのではないかと。この問いに対しては次のように答えられるかもしれない。〔すなわち〕人は医学の諸原理に関する知識をそれほど持たなくても、機械的な技術を実践するように、ある程度医学を実践することもあると。船乗りは、航海術の諸原理をほとんど知らなくても、船を操舵することができるし、天文学や、球面三角法（spherical trigonometry）や、あるいは球面の投影図法について全く知らない人であっても、指針盤（dial）を作ることができる。人生の他のあらゆる実践的な技術においても事情は同じである。しかしそれでも、これらすべての〔技術〕において、それら〔の技術〕を基礎づけている諸原理の知識から生起する強みは明らかである。しかし医学においては、その技術の「諸原理（principia）」に精通していることの必要性ははるかに大きい。というのも、医学の実践のために規定された、あらゆる症例に適用されうる一般的な規則などありえないからである。年齢の違い、体質の違い、気候の違い、さらに他の多くの要因が、処方しうる最も平明な治療法の適用においてすらさまざまな変動を引き起こす。したがって、自らの職業（profession）の諸原理に関する知識がなければ、医師は

しばしば途方に暮れざるを得ない。[医学の] 実践に成功してはいるが、同時に医学の諸々の基礎 (foundations) に関する知識に欠ける多くの医師が存在したことは容易に認められるだろう。しかしこれは、彼らの並外れた資質と明敏さのおかげであって、[そうした資質と明敏さによって] 自らが持っていたほんのわずかな知識を彼らは思慮分別をもって適用することが可能となり、そしてその結果として、成功することができたのである。他方において、おそらく、別の医師は、自らの職業についてより良く学んでいたにもかかわらず、この生まれながらの資質と明敏さを欠いていたがゆえに、自分の知識を間違っただけで適用することによって、自らの [医学の] 実践において大失敗を犯したであろう。その上、医学はきわめて複雑な学問で、それを正規に研究する人々の多くが、その学問のある部分に特別な愛着を持ち、そしてその部分が彼らの注意をあまりにも強く引き付けるので、彼らは他の分野の研究を疎かにしてしまうほどである。このことの結果として、私たちの職業の中には、解剖学や化学や植物学において彼らの能力 (skill) に関して著名でありながら、にもかかわらず、極めて平凡な医師であった人もいたのである。しかし、これらの学問の深い知識がそれだけでは、実践的な優れた医師を作るのに不十分であるとしても、それでもなお、良識 (sense) ある人は、そのことからそれらの学問が優れて役に立つものでないなどと推論しないであろう。

私はここでこれらの学問の微に入り細を穿つ (minute) 知識の必要性を主張しているのではないし、また実際、それを獲得するために時間を割くことも出来ないであろう。身体の様々な運動や姿勢のすべてにおける筋肉の形状に関する特別の知識は、医師にとってよりも画家もしくは彫像家にとってより必要とされる研究である。この点において彼ら [画家もしくは彫像家] は熟達した解剖学者であるべきだ。もし化学がその完全な範囲と、あらゆる有用な技術への適用において遂行されるならば、それは際限のない研究である。あらゆる植物のあらゆる事情に私たちが精通しようとするれば、植物学もまた同様である。

それ故に必要なことは、学生は、彼自身をこれら諸学のもっとも重要で基礎的な諸原理の精通者とするよう努力する一方で、常に、それら諸原理の自ら自身の職業への適用を心がけ、自らの注意をその方向へ注ぐことである。

全体として私は「次のようなことが」明らかになるよう望んでいる。すなわち、自らの職業の諸原理を理解し、その職業と関係する自然の知識のあらゆる分野に関する広い知識を持ち、自らの知識を正しく適用し、他の医師と同じ資質と注意力を持つ医師は、実践的な医師として、医学の諸原理や、それと関係する諸学の諸原理に無知な医師に対して、大きな強みを持つに違いないということである。資質やセンスは確かに天からの特別な贈り物であり、きわめて広範囲な学習もしくはきわめて勤勉的な努力をもってしても獲得できるものではない。しかし、このような「学習や努力といった」援助があれば、資質とセンスは最高の進歩をなすことができるのである。

[[医師に] 光彩を与える能力 (ornamental qualifications)]

ある意味で医学の合理的な実践にとって本質的である上述の学問の諸分野に加えて、どちらかといえば「医師に」光彩を与えると判断されるけれども、しかし、優れた医師であれば無知であるべきでない他の分野も存在する。

[医学の歴史に関する知識]

全ての紳士は、自らが専門とする科学の歴史に精通していると期待しても無理ではないであろう。医学(medicine)の歴史は単なる好奇心の対象ではない。医師にとってそれは有用でかつ興味ある探究である。異なる時代における医学の実践に影響した数多くの理論を探究するのは、確かに楽しい仕事ではないし、一見すると役に立たない仕事に見える。これらの理論にも一連の流れがあって、それらは順番に称賛され、医学の実践に大きく影響し、そしてその後相応の忘却に沈んだのである。もしもそれらの理論の悪い影響が、それらの

〔理論〕を生み出したばかげた企てとともに終わっていたのであれば、それらの〔理論〕の記憶をよみがえらせる必要はなかったであろう。しかし実情はそうではなかった。ある種の間違った実践がある種の広く行き渡った理論の結果として導入されると、すぐにもその理論そのものの基礎づけが適切なものか間違ったものかを判断できない人々の間に広まるようになる。気概と高潔さを持つ医師ならば、おそらく立ち上がり、その理論のばかばかしさを明らかにするであろう。しかし、実践におけるその理論の非常に有害な帰結を取り除くことは彼にはできない。これらの〔帰結〕は、それらの〔帰結〕を自ら自身の理論に適合させた数多くの無知な人々の間に素早く広がってしまっているからである。というのも、医学を詐称するきわめて無学な人々ですらも自らの理論をもっていると見なさざるを得ないからである。そしてまたそのような詐称者たちは、それがあるいは無知からであれ、あるいは思い上がりからであれ、あるいはさらに習性からであれ、とりわけ、理論というものに並外れて愛着を抱く人々だからである。

医学 (physic) の歴史に関する徹底した知識は、〔医学の〕実践において採用されている行動の原則〔格率〕(maxims) および治療法の源を発見することによって、医師をして、間違った推論、あるいは間違った思い込みによって導入されたそういったもの〔行動の原則や治療法〕に対して当然疑い深くさせるであろう。とはいえ、価値あるいくつかの治療法が時にばかげた理論の結果として発見されたということも認めざるを得ない。医学の歴史に関する知識に伴うもう一つの利点は、それが私たちをして、時の経過と他の偶然事によって使用されなくなっているいくつかの効果的な治療法に通じさせてくれることである。

生活様式 (manners) の変化や医学に関する私たちの純理論的な (speculative) 諸体系の変化が、古代の人々によって採用されたある種の大胆ではあるがうまくいった治療法の一般的な使用をある程度弱める一因となって

きた。それらは、焼灼法 (cauteries) や種々の運動法や摩擦法 (frictions) や塗油法 (unctions) の適用の場合において、そしてまた他の事例において例証されるだろう。同様に医学の歴史は、用語を取り換えただけで、繰り返しの世界に押し出されてきた同一の空想的な諸々の仮説を、時代の諸々の変革がいかにして甦らせるかをも私たちに示してくれるのである。

医学の進歩は、ヒポクラテスの時代から、その専門家たち (professors) の数と能力とを考慮すれば、確かにゆっくりではあったが、それでもそれ [医学] はその時代以降かなりの進歩をなしてきたのである。医学の歴史は、どのようにしてそれ [医学] が、偶然による発見や経験主義者たち (empirics) の向う見ずな企てや明敏な医師たちの正確で信頼しうる観察によって、そしてまた、真に医学的で哲学的な資質を持った人々の冷静沈着で非常に慎重な (diffident) 推論によって徐々に改善されてきたかを示してくれる。そしてまた医学において広く行き渡っているもっとも空想的な仮説といえども、まったく役に立っていないと考えられるべきではない。どんなに間違っていようとも、ある種の理論を裏書きしようという熱望は、いくつかの重要な実験を引き起こしたのである。自然に対する支配力を誇りにし、彼ら自身の薬の効能を信頼した熱狂的な化学者 [薬剤師] (chemists) たちは、ときに驚くべき治療を、医師ならば誰ひとりあえてやってみようとは思わなかったであろう治療法によって、成し遂げたのである。他方で、シュタール (Stahl)⁹と彼の追隨者たちは、ほとんどすべてのことを「自然」に委ね、病気の歴史と、さらに治療を果たすうえでの「自然」の働きに入念な注意を向けることによってその技術を前進させたのである。

[数学の知識]

数学の研究に関してあなた方にどのようなアドバイスを与えるべきか私は迷っている。というのは、この主題に関する私自身の判断に私は信頼をおけな

いからである。私がある種の生まれながらの遺伝的な愛着を持ち、小さいころからのひいきであり、喜びであった学問に対して、私は偏った気持ちを持っているのではないかと恐れる。私たちが自然哲学において何らかの進歩をなそうとするのであれば、少なくとも、この学問の基礎に通じておくことは間違いなく必要である。そして私がすでに示したように、その学問〔自然哲学〕は動物の生体システムに関する徹底した知識ときわめて密接に関係しているのである。前世紀の終わりと同世紀の初めごろに、数学の医学への適用は、いくつかの良い結果を生み出した。とりわけそれは、ガレノス流の化学学派の間違った諸々の仮説と、医学を無意味な言葉に関する論争に巻き込んだあの学術的な (scholastic) たわごと (jargon) を追放するのに貢献した。より自由な探究の精神、実験と観察に対するより大きな関心、医学的推論におけるより大きな明晰さと正確さを、それは医学のあらゆる分野に導入された。しかしながら、私はこの研究がしばしば乱用されてきたことも認める。数学派の医師の多くが不幸にして動物の生体システムのすべての現象が数学的原理のみによって説明されうると思い込んでしまった。けれどもこれら〔数学的原理〕のある種の症例への適用の不可能なことと、それら〔数学的原理〕の他の〔症例〕へのあまりにも性急な適用とが、しばしば非常に間違った結論へと導いてしまったのである。実際、幾何学的な推論の精密さや明確さや美しさ (elegance) に慣れた人であれば誰もが、数学的言語の行列 (parade) や、そしてまた「論証 (demonstration)」という、あまりにしばしば誤用される言葉の乱用 (prostitution) を、ある種の憤りをもって眺めるに違いない。私が今述べたことから、あなた方は、私が数学の研究を推奨しているのは、医学における何らかの重要な発見へと直接的に導いていくものとしてではなく、それが自然哲学に役立つことのほかに、それが発明を促進し、精神を開放し、それ〔精神〕を緻密で正確な推論という習慣に慣れさせる傾向を持っているという確信から〔推奨しているのだと〕理解してほしい。ただし、あらゆる研究の中でもっと

も魅惑的なこの研究、そしておそらくあなた方の注意関心をあなた方の職業の主要な目的から逸らしてしまうであろうこの研究にあまりに深入りしないようあなた方に忠告しておきたい。そしてまたあなた方に望んでおきたいのは、その研究があなた方を、数学的証明を許さない対象において、懐疑主義や判断の停止という気持ちへと導いていくことがないように用心してほしいということである。きちんと区別するという習慣はしばしば有益ではあるけれど、時に日常の生活や、そしてまたあなた方自身の職業に関わる事柄（business）とは両立しないことがあるということ覚えておきなさい。

【ラテン語、ギリシャ語、フランス語の知識】

ラテン語に徹底的に通じるようにあなた方に推薦する必要があることを私は望んでいる。かくも多くの時代を通じて、ヨーロッパの学者たちの普遍（universal）言語であり、そしてまた、自らの見解を国から国へとかくも容易にかくも素早く伝達するのに貢献しているものに通じていない医師の読書は、非常に狭い範囲に限定されざるを得ない。学ぶこと（learning）の利益（interests）は、その言語の不使用によって、そして著者たちが彼ら自身の母語で書くという現代風のやり方によって、きわめて速やかに損なわれることであろう。しかし一方で私はここで、自らのラテン語の知識を高く評価する人々が陥りやすい過ちについて、そしてまた、他のいかなるものにもまして、次のような増大しつつある害悪の一因となってきた過ちについて注意しておかねばならない。私が言わんとしているのは、表現の古典的純正さや優美さに対するあまりにも大きな切望である。言語の目的は、私たちの考えを明瞭に、力強く、正確に伝えることにある。もしこれらの三つが真に古典的なスタイルと結びつけられるのであれば、それは付加的な偉大な美となる。しかし一方で、あらゆる技術とあらゆる学問において近代人によってなされてきた数々の進歩から、多くの考えや多くの物が出現しているのだが、こういったものは、ローマ

時代の古典がそういったものを知らなかったがゆえに、表現するすべを持ちえなかったものである。それゆえに、これらの考えを表現する機会を持つ著者は、自らの言いたいことを表現するためには、自らの母国語にある言葉をラテン語化するか、もしくは、二流の著者たちによってしか使用されていないラテン語を採用するかせざるを得ない状態にある。もしも彼が、厳密に古典的であるもの以外の言い回しを使用しないと決心すると、彼は多くの場合において、彼が言いたいと願っていたものを抑圧せざるを得ないか、あるいは、勢い (energy)、正確さ、分かりやすさというより本質的な点において、彼が言葉遣い (diction) の優美さによって手に入れるあの名誉を失わざるを得ないことになる。私たちは、ケルスス (Celsus)¹⁰において医学ラテン語の純正さと優美さの基準を持つという、私たちの職業における特別の強みを持っている。しかし一方でなお、この学問における諸々の進歩から生じる、表現されるべき種々様々な医学上の考え方が存在するのである。それらの考えは、ケルススもローマ時代の他のどの著者も持ちえなかったものである。

私はここであなた方に、内容豊かで、表現力に優れ、耳に快い言語であるギリシャ語をどうしても薦めずにはいられない。私たちのきわめて昔の作家たちや、最も優れた作家たちのある人々がその言語で著作をしている。特に医学の父であり創設者であるヒポクラテスがそうである。医学の学術用語のほとんどすべてがギリシャ語由来である。それ故にその言語の知識は、明らかにその職業におけるあなた方の進歩を容易にするに違いない。その上、紳士に相応しい教育 (liberal education) を自負している医師には、日常的に用語を使用しながら、それらのもとの言語に彼が門外漢であるということは相応しくないことである。

フランス語の知識の必要性は明らかである。その国のほとんどすべての作家たちは、そしてその [作家たちの] うちの多く [の作家] は非常に為になるのだが、彼ら自身の言語で書いている。さらにまた、[その言語] はヨーロッパ

では非常に一般的になっていて、旅行する紳士のすべてが必然的に自ら自身をその言語の精通者にせざるを得ないのである。

[私たちの母国語の知識]

あなた方自身の言語に関心を払うよう薦めるのは、一見すると余計なことに見えるかもしれない。ところが、本当に優秀な多くの医師が、作文に対する無知あるいは無頓着によって、自らを嘲笑の対象としてきたことはよく知られている。紳士としての教育を受けたすべての人が自らの母語を、少なくとも文法的な正確さをもって書くのは当然のことと思われるかもしれない。しかし恥ずかしいことにこの点においてすら私たちの著者の多くは不十分なのである。優美さというもの (elegance) は達成するのが難しい。そしてまた優れたセンス (taste) がなければ試みるのも危険である。医学の書き物において私たちが第一に必要としているのは、明快さであり、正確さであり、平易さであり、方法 (method) である。こういった主題において美辞麗句を多用した、高度に装飾された文体は、まったくの場違いであり、著者が「自然」から写し取っているよりはむしろ彼の想像から書いているのではないかという当然の疑念を生み出す。私たちは医学 (medicine) の分野において多くの浩瀚な書物を持っているが、しかしそれらの[書物]は、仮に役に立たない前書きや弁解や引用や、その他の余計なものが取り除かれ、そしてそこに含まれる数少ない事実と緻密な帰納推論に限定されるならば、非常に小さな物にまで縮小されるだろう。医学に関する書き物のすべての種類において私が主にあなた方に推奨したいのは、諸々の事実の分かりやすく簡潔な記述 (history) に次いで、方法に対する徹底的な配慮である。私は自らの主題を際限なく分割するいくにんかの著者たちに非常に顕著 [に見られる] 体系と配列のあの見せびらかし (display) の称賛者ではない。これは、その種の書き物に慣れていない若き読者に強い印象を与え、著者の独創性と正確さを高く評価させるかもしれない。しかし一般

的にいってそれは単にごまかしに (deceit) 過ぎない。そのようなものは容易に達成される著述の様式であるし、そしてまた実際の区別よりはむしろ名目上の区別から成り立っていたスコラ哲学の論理学が称賛されていた時代に最高度の完成状態にあったものなのである。

〔医学に関する書き物に相応しい文体と作文についての所見〕

とはいえ私としては是非次のようには言っておきたい。私たち自身の専門集団 (faculty) の読書のためにのみ意図された学問の本の書き方と、一般の人々が特に関心をもち、彼らが理解できる主題について彼ら向けに書かれる本の書き方とは、違っていいし、違ってあるべきであると。最初の場合においては、私が今まさに言及した特質のみが必要である。ここでの目的は、ただ真理を探究し、発見されたものを伝え、新しい事実を述べ、あるいは既存の事実を新しい光と組み合わせにおいて示すことだけである。そのような本は、それを公正で偏りなく吟味する用意ができていて、かつ自ら進んでそうしなければならない人々向けに書かれている。しかし、一般の人々向けに書かれる医学上の著作では、その目的は彼らをして正しく考えさせることだけではなく、適切に行為させることであり、教示するというよりはむしろ改心させることであるだろう。それゆえ、その著作は彼らをしてそれを読む気にさせるにふさわしい仕方で書かれなければならない。主題からは出来る限りあらゆる専門用語が取り去られ、完全に彼らの理解力に合わされなければならないだけでなく、著者にはそこに含まれる真理を鮮やかな色で、想像力を掻き立てるような仕方で表現し、感情を喚起することが許されてよい。このようなものがなければ、少数の思索的な人々が、〔その著作に対して〕 冷静な賛意を表明するかもしれないが、しかし、その本は一般的に、あるいは、十分に受け入れられることはないであろう。そこに含まれる事実に関して言えば、その本の真の価値 (merits) と、さらにそういった事実からの推論の正当性は、おそらく専門集団によってしか

正しく決定されえないものである。作文としてのその真の価値は、一般の人々の賛意と、それが生み出す良い結果によって評価されなければならない。

医師にとって光彩を放つと判断されうるすべての要件を数え上げるにはあまりに多くの時間が必要とされるであろう。一般的に言えば、紳士に相応しいいかなる楽しみやいかなるたしなみからも医師が締め出されなければならない理由はない。反対に、こういった〔楽しみや嗜み〕は、彼の職業からくる〔他の職業よりは〕より厳しい研究と疲れからの心地よい開放を与えるものである。それら〔楽しみや嗜み〕は、彼の交際をより愉快なものにし、より楽しいものにする。そしてまた、ときに現代の学者たちにはっきりと認められる、あの厄介な学術的態度に替えて、それら〔楽しみや嗜み〕は彼の振る舞い全体に開放的で自由な雰囲気を満ち渡らせるのである。

註

- 1 底本は、*The Works of the late John Gregory*, M. D. 4 Volumes (1788年) . 中の Volume 3: *Lectures on the Duties and Qualifications of a Physician* (1770年, pp.81-116.) である。本文確認のために、次の文献も参照した。Laurence B. McCullough (ed.), *John Gregory's Writings on Medical Ethics and Philosophy of Medicine*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht, 1998. なお、今回の翻訳から、1755年に刊行された Samuel Johnson の著名な英語辞典をも参照文献として加えた。本文中のイタリックの箇所は、「 」でくくった。ただし、大文字で始まる Nature も「 」でくくった。底本と McCullough の本文との相違については、重大だと思えるもの以外はいちいち指摘しない。
- 2 グレゴリーは医学に当たる言葉として、*physic* と *medicine* とを使用する。前者は理論的な学としての医学を、後者はより臨床的な学としての医学を表すのに使用されているように思われる。後者を医療と訳す方法もあるが、常にそう訳すわけにもいかないので、両者に医学という訳語を当てることにした。なお、初出以外は特に原語を挙げないが、特に区別して使用されていると判断される場合はいちいち言語を挿入した。ジョンソンの辞典では *physick* と綴られている。
- 3 グレゴリーは、診療行為を行うことを単に実践する (*practise*: 名詞形は *practice*) と表現

- することが多い。他に医学を實踐する、医学の實踐などの表現も使用している。
- 4 ジョンソンの辞典では、economy (oeconomy) の意味の一つとして、system of motions; distribution of every thing active or passive to its proper place が挙げられている。前回までの翻訳では、animal oeconomy を動物生理学としていたが、physiology と紛らわしいので今回より動物の生体システムと変更した。
 - 5 自然の全体、もしくは、自然の力を表現するとき大文字で始まる Nature が使用される。
 - 6 ここに言葉と訳した原語は、テキスト及びマッカローの本文で world となっているが、これでは意味が通らないので、誤植と判断し、word と読み替える。McCullough の前掲書191頁を参照。
 - 7 この箇所、テキストでは the name of Theories となっているが、McCullough の本文では the same Theories となっている。ここは意味の整合性を考え、テキストの方が正しいと判断し本文のように訳した。McCullough 前掲書191頁を参照。
 - 8 見出しには「植物学」とこの見出しの間に、「自然誌 (natural history)」という見出しがあるが、該当箇所が見当たらないので省略した。
 - 9 Georg Ernst Stahl (1660-1734) のこと。ドイツの化学者、医師で、包括的な燃焼理論、すなわち、フロギストン説を初めて打ち立て、その後の化学思想に大きな足跡を残した。生理現象と化学作用の深い結びつきを信じ、健康と病気を身体の生命力にもとづいて理解しようとした。(以上は、ブリタニカ国際大百科事典とマッカローの注からまとめた。)
 - 10 Aulus Cornelius Celsus は1世紀ごろのローマの著述家。『大百科全書』を著わし、そのうち『医学について (De medicina)』のみが残存している。1478年にフィレンツェ版が刊行されて以来、ルネサンス期にヨーロッパでもっともよく読まれた医書の一つのとなつたとされる。(以上は、ブリタニカ国際大百科事典からの要約。)